



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第四十七号(一日発行)
平成五年八月一日

北海の古平風土物語 (十三)

鉄砲名人・館岡重助のこと 上

高橋 源 五口

このごろ私の家では(父・小野寺源太郎)、一昨年の本屋の新築からはじまって、雑倉や馬小屋の造作などが続いていた。

今年もまた十月になって、五十歳近い棟梁の館岡重助さんがハッピに頬かぶりの威勢のいい姿で、うしろに大きな道具箱を背負った若い弟子を連れてやってきた。これから下屋下し(げや)大きい屋根からさしかけの屋根を出す)だという。

館岡さんは、仕事のよくできる腕のいいお抱えの棟梁であった。越後育ちだとかで、お国なまりで威勢よくしゃべり、とんち話、を聞くのが面白く、楽しみでもあった。

弟(小野寺源吉)は、早速畑から紅く色づいたリンキ(りんご)をもいできてすすめた。

「げんき(源吉)のリンキ、あめえよんたなあ」

「げんきのほつべア、リンキみだよんたもなア」とほめる。

「げんこ(源吾)私のこと)、ナス(梨)もめいもんだ」と

ナゾをかけるので、私は裏の梨畑から黄色の丸梨をもいできて出した。

弟と二人で側の角材に腰を下ろして、棟梁のトントン話を待った。

「てず(鉄)、一服つけるか」
弟子の鉄は、よく切れる切り出しの小刀で梨の皮をむき出す。

棟梁は腰を下ろして、ナタマメさせるを叩き叩き話をはじめた。

「おらアなア、ちゃんこいから鉄砲コ好きでなア。鉄砲撃つだ

ば、古平一の名人だどッ。」
「ラルマギ(ラルマキ)沖町)がらツリンボ(チャラチナイ)ミミタレ、ハナタラス(港町)

へロガライス(へロカライシ)群来町)まんでのみんず鴨(水鴨)どガ口の沢のみんず鴨(水鴨)みんな俺のもんだど」

「どんだつて、狙ったらばはずさねえど。鴨コあなんぼ水コさくぐても獲つてまるんだ」と得意そうである。鉄がむいたり

ンキやナシをかじりながら、またしゃべりだす。
「山の方アな、古平中の熊コ、

四

「イフミス音を聞く」

ある日、二人のメノコが山奥へウバユリを採りに行ったが、行方が知れなくなつてしまった。村中で探しに出たがとうとう見つからなかった。

その時、村にイフミスということをする者がいるので、その者に占つてもらつたら、ということになり、早速占つてもらつたところ、「心配することはない。熊の害もなく、達者でいる。あまり

狐、狸、かわうそ、りす、兎コに、イダズコ(いたち)、ずんぶ、いっぺい(いっぺい)獲つたどオ」

ナタマメさせるを叩きながら「鉄砲でたねねば、とらばさみもしよつて行ぐんだもせえ」

「そのうずね(その内に)、鴨コ撃つはんずまったらば(始まつたら)、すらへるね(知らせる)。ゲンキあ(源吉)、ネギしよつて、ゲンコあ(源吾)ゴンボしよつていっしよずに(いっしよに)来いよ」

山に深く入って道に迷つたもので、今は山を越えた所に止まっている。顔に例えれば探しに行った者は今口のあたりで、メノコは頭のあたりにおいてだんだん下がって来ている。今日は目のあたりで行き合うだろう。これはイフミスをする者の体の中の音で判断できる。

二人のメノコは三日目に無事帰つて来た。船がまだ見えないのに船の来ることを言い、鯨の群来することも言い当てた。

アイヌの《ことわざ世間ばなし集》から

大沢さんの夢と 歌人・奥さんのこと

なぜか恩師・大沢さんの夢を見た。不思議なことだと思っていたら、ふと気がついた。一週間ほど前に、大沢恩師の奥さんの歌集を眠れままに読んだのである。

酒を買いさくら餅買い

この部屋の五畳に

親子三人寝(い)ねたり

短歌にもこんな解り易く、底

の深いひろがりのある詩があるだろうか。私は感動した。二番目の息子さん(弘前大出身の)が九州に就職され、まだ独身だったころお二人で旅された時のことだろうと思った。酒は息子さんが飲んだのでしよう。テキパキとつまみなどを用意され、好きなさくら餅を食べながら、短いが充実した、子を想う旅だったのでしょう。先々月に続いて、死んだらど

うなる人間は? を書いて、また今月もこんな文章になってしまった。またすぐお盆が参ります。たぶん大沢さんとお話ができるようです。何べんでもお会いできるような気がしてなりません。

奥さんの歌集『旅の途中(みちくさ)』より、
母逝きて過ぎし十余年
父はいま心定まり洗礼を受く
臨終に洗礼受けし母なりき
静かなる父の面見ゆるなり
癒えがたき癌と告ぐるも
たじろがず医師らを煙にまき

故郷を想ひ 福井孝平

し母なりき

食叶わぬ臨終の際に握り飯を

われに作らせみまかりし母

この四首の歌が、人間の生死

生きざまというが大変勉強になりました。

来月から気分を変えて新しい

出発点に立ち、『せたかむい』

に恥をさらしたく思っておりま

す。

最近の一句を――

奥尻の津波のあとや夏寒し

海神の魔説 伝

婦女禁制の神威岬

『江差追分』と神威岬

この「二八取り」
によって、奥地の鯨
漁業は大いに発展し
た。岩内は市街地を
つくって品物も豊富

になり、そのほか古宇・磯谷・
歌棄・寿都・島小牧(島牧)の
諸場所も、百戸から二百戸の土
着する者があつて以前より大い
に賑つたのである。

北海道の開拓は、その後の幕
府の直轄時代や、開拓使時代に
始まったというが、飢饉という
偶然のことからこのころに始ま
ったといえる。移民には、巨額
の経費と手間がかかるものであ
るが、飢饉という恐ろしいこと
が、北海道への移民ということ
を大いに助けたことになる。

このように、神威岬から南の
各場所では次第に人口も増えて
繁盛して来たが、それより北の
各場所では和人は一人も土着し
なかつたし、鯨漁期などには大
くの出稼人が来るが、漁期が終
れば皆帰つてしまつて、残るの

は越年する漁場の番人とアイヌ
だけで、その寂しさは言葉では
言いなかつた。これは、神威岬
が婦女の通行禁止をしているこ
とによるもので、婦女子のいな
い所には、男子が居着かないこ
とを証明している。江差追分の
「忍路高島およびもないが、
せめて歌棄磯谷まで」

というよく知られた文句は、江
差や福山(松前)地方の婦女が
男子の西蝦夷地へ出稼ぎに行く
のを送るときに情を述べたもの
で、神威岬より奥にある忍路や
高島へは同伴することはできな
いが、せめて岬より手前にある
歌棄・磯谷まで同伴したいとい
うことであり、神威岬のカムイ
は、奥地の開拓を阻害するだけ
ではなく、人間の情を解さない
無情の神と思われている。





古平青年会結成

古口川 義雄



一泊二日のさやかなバスの旅は、ベルリンの壁を破って歓声を挙げたドイツの若者と同様この時も『これが青春だ』とばかり、旅の途中でどこでも歓声となつて現れていた。上手な歌い手が、繰り返してみんなを喜ばしてくれた『ワゴンマスター』とかの曲は、今でも鮮明にメロディを覚えてる。

昭和も三十年代に入ると、混乱の世の中も少しずつ先が見え出してきた。ふるさと古平を巣立つて行く会員も次第に速度を早めて多くなつた。

新地の消防番屋の二階は、青年会の活動家の集会場となつていたが、ここでの集會こそ會の総てを生み出す場であり、青年たちの情報交換の場であり、そして憩いの場でもあった。このころ集まつてきた仲間たちを思い出すかぎり列挙すると、副會長の高野常弥さん、同じく竹本紅子さん、会計幹事の横川正一さん、幹事には吉野富雄さん・

浩次さん兄弟、久保田洋子さん・啓子さん姉妹、大地友江さん本間正次郎さん、三河幸夫さん田中栄子さん、佐藤敦武さん、斉藤兼二さん、斎藤嘉勝さん、上山忠義さん、山野富生さん、皆松とも子・磯子さん姉妹、岩崎淳子さん、木津京子さん、長谷正二さん、本間光司さん、工藤ヨシエさん、東山ルミ子さん黒山チエさん、木村啓子さん、



禅源寺の参道の中ほど、寺に向かつて右側に一基の石碑が建っています。多くの人が通る場所なのですが、案外人に知られていません。碑の表には「故佐藤傳作碑」と書かれています。

本名が市左衛門で、号が傳作、天保十四年（一八四三）新潟県に生まれま

故佐藤傳作碑

建立・明治四十四年十一月六日
古平消防組一同

した。京都に出て仏師となりましたが、京都でも名前の知られた仏師でした。事情があつて、その後古平に渡つて来ましたが、古平に来る前に江差にも住んでいたようですが、これはまだはつきりしません。古平では、仏師としての腕を振るつて禅源寺観音堂の建築や、願雄寺、いま改築中の

宝海寺の欄間など優れた彫刻を残しています。また、消防創設に大きな貢献があつたことから、当時の古平消防組がこの碑を建てました。

昭和三十五年九月二十八日伊藤町長ほか消防団関係者が集まつて、消防の功労者として碑の前で供養祭を行いました。

黒川百合子さん、宮津範子さん、沢田安江さん、白岩チエさん、墓目哲夫さん、などなど。すでに故人となられた方の多

深遠山 寶海寺

一世の世紀をこえ改築
七月三十一日日本堂主上棟式
明治三年、京都東本願寺直屬の説教所として設置。翌年、新地町に仮本堂を建立。同十四年、一般末寺に列し寶海寺となる。同十八年、現在地に本堂を建立。本堂の建築は、日本社寺仏閣建築界の名匠といわれる九代・伊藤平左衛門で、東本願寺や靖国神社などという有名な建物を建立している。

今回の改築は、福津組が施工し、基本設計は十一代目になる伊藤平左衛門があつた。平成五年十一月の完成をめざし、七月三十一日、仏式による厳粛で盛大な上棟式が行われ、それを祝つて境内で餅まきもあつた。

開教以来百二十三年、古い歴史に新しい法灯がともつた。

大沢 松蔵 (談)

荷物の間にはさまって寝起きをしながら、一週間の航海のうち、ようやく目的のカムチャツカの漁場に着く。

漁場に着くとすぐ全員で荷役が始まるが、これに四、五日はかかる。網やそのほかの漁具や食糧、石炭、小屋掛けの材料など、これからの漁や生活に必要なものをすべてが陸揚げされる。さけ漁場での仕事は、沖獲りと、陸に上がっての定置網漁に分かれる。

上陸する前に、ソ連の役人が本船まで来て打ち合わせをし、それが終わってから上陸が始まるが、写真を張った書類と見比べながら一人ずつ確認する。

上陸しても、漁場の定められた区域からは一步も外に出ることは許されない。外に出たのが見つかった撃たれても、文句は言えなかった。それほど嚴重であった。所によつては回りに有刺鉄線が張つてあった。

定置網の漁場は、三か統で一

組となり、一か統は二十人から二十五人で一つの漁場を受け持ち、それぞれの漁場には番屋、廊下が建っている。

六月の中ごろになつても、まだ氷の張っている所もあつて、

「今日日はこんな日」

七年ぶりの慰霊祭に感激 『鎮魂歌』詩碑に記る

[昭和27年]

[昭和41年]

八月十五日正午、終戦の詔勅が全国に放送され、日本の敗戦で長く続いた戦争は終わった。

この敗戦をさかいにし、国内の様子は一変し、特に軍隊に

関することは、人前で話すこともはばかられた。役場などにも「軍隊に関するものは、いっさい燃やすか、処分してしまふこと。」というような通知が念をおすように何回も出された。

戦争中は、出征する兵隊さん

気温が低いので毎日石炭をたくが、夜も焚きどおしである。番屋の片側が通路になつていて、一段高い所に一列にふとんを敷いて寝る。それだけに火の始末には皆が気をつけた。

漁場には網作りをする人がいて、出来た網を合わせ、大船頭の指示で型入れする。定置網には、網を揚げるのに困るぐらい魚がいっぱいかかるが、雑魚は海に捨てる。ソ連との取り決め

を盛大に見送りをし、戦地で不幸にも亡くなられた時は、英霊として町葬によつてその冥福をお祈りした。

戦後は、町が一定の宗教にかかわることができなくなったこともあり、昭和二十二年一月三十一日、禅源寺で合同葬儀を行うことでもできず、遺族や町民の中にも寂しい思いがあつた。

昭和二十七年八月十六日、古

で、サケ・ベニサケ・マス以外の漁獲をすることはできない。労働時間のきまりは無い。魚が獲れてる限り働いた。一日に二回網起こしをするが、午後九時ころ帰ってから魚の腹を割き始末をしてから寝るが、早くても十二時である。夜になつても太陽が沈まない。少しの間見えなくなるが、それでも新聞を読める明るさで、四、五十分するとまた太陽が昇つて来る。

平町遺族会、薫桜会が主催し、焼け跡の忠魂碑前で、戦後はじめての戦没者追悼式が行われ、遺族らは七年ぶりの追悼供養に感激の涙を流した。以後、この追悼式は毎年続けられている。

昭和四十一年八月二十四日、吉田一穂の「鎮魂歌」を詩碑として建立し、碑に戦没者二百八柱の氏名を刻して戦没者を祀る慰霊祭が行われ、それを記念して遺族には一穂の短冊が贈られた。古平の宿で、一穂はその二百枚の短冊を夜遅くまで書いたというが、現存しているうち、確認されているのは数枚にも満たない。

『野につみて花はむらさき』現在の戦没者数二百十五柱